

発行

令和8年3月

発行元 徳 泉 寺

仙台市宮城野区

榴岡 3-10-3

(022)297-4248

tokusenji.send

ai@gmail.com



ホームページ

tokusenji-

sendai.com



Instagram

tokusenji.sendai



TOKUSENJI.SENDAI

東日本大震災追悼法要・勿忘の鐘

今年も三月十一日がやってきました。未曾有の大震災。多くの人の人生や価値観を大きく変換させる分岐点でもありました。今年のこの日、みなさんはどのように過ごされましたか。

徳泉寺では毎年、震災発生時刻に合わせて鐘を撞き、忘れること勿(なか)れとあの日に思いを馳せます。今年もご参詣の方とともに手を合わせ、あの日を思い語り合いました。

震災発生から十五年。熊本や能登でも大規模な震災が起こり、山火事、疫病、飢饉など物語の中でした。なかなか災害が次々とやってきて私たちの日常を揺るがしています。子どもの頃には想像もしなかったようなことが次々と起こっている現実。心が追いついていかないような感覚を覚えます。無常、常ならぬこと、どんなことでも起こるのが人生。とは言いますがそれでも(え、こんなことが起こるの?)と毎回、衝撃を受けている自分がいます。

震災の日と前後して、NHK Eテレの「こころの時代」宗教・人生」というドキュメンタリー番組で『寺に帰れば』が放送されました。震災時に避難所として開放された岩手県陸前高田市にある真宗大谷派寺院「正徳寺」さんを舞台に、当時六年生だった長女のいちえさんを軸にしたこの十五年の軌跡の物語でした。いちえさんには震災前の記憶がないと言います。小学校の校庭

からみんな山へ向かって走って津波から逃げた経験を持つ彼女は、その後避難所として開放された自宅(お寺)で住民のみなさんと五カ月間、寝食を共にしました。本来なら守られる側の彼女ですが、否が応にも「ちゃんとしなければ」ならず、辛いことを辛いと言えなかったと当時を振り返り、またその母親の坊主さんも「子どもたちのケアをしてあげる余裕がなかった。」と後悔を口にしていました。

今年の三月十一日、徳泉寺に家族で避難してきていた当時五歳だった二十歳になる青年がお父様と一緒にご来院されました。本堂へ入るなり「わあ、ここ、こんなに狭かったんですね。僕、体育館くらい広いと思ってました。」と声をあげられ、「そうね、あなた、今の三分の一くらい大ききだったものね。」と話しました。五歳の彼と二歳の弟とご両親。お父様はお仕事で仙台に残り、お母様と二人で親せきの家に避難することになったとき、小さな彼はお母さんと弟を守らなければ、と顔を精一杯引き締めていたことが思い出されます。

幼少期に震災を経験し、多感な思春期にはコロナ禍を経験した彼ら。子どもが子どもらしくくいられるにはそこが安心できる場所であればならない、といえます。自然災害の前にはなすすべもありませんが、防げることもあります。世界中すべての子どもたちが子どもらしくあれますように「世の中安穏なれ 仏法広まれ」。

